

群馬 教 育 セ	G10 - 01
	平26.254集
	道 徳

「思いやり」に視点をあてた道徳的心情を 育てる指導の工夫

— 資料提示と発問の工夫を通して —

特別研修員 中山 明子

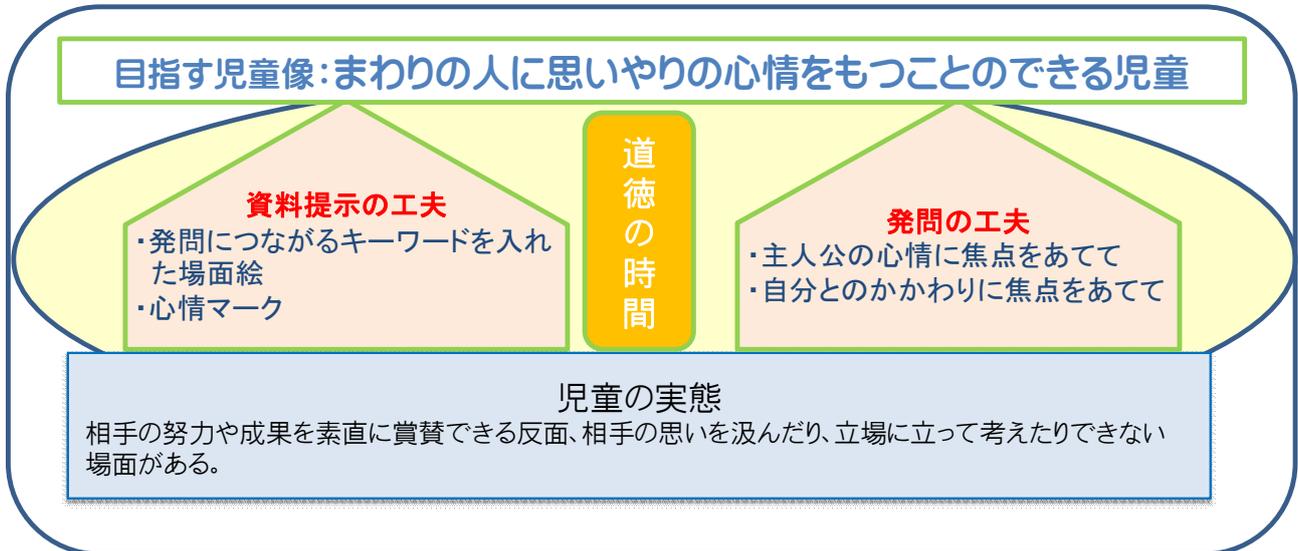
I 研究テーマ設定の理由

群馬県では「いじめ問題対策推進事業」を立ち上げ、全県でいじめ防止に取り組んでいる。それを受け、本校では今年度の学校経営基本方針として「思いやり」に焦点を当て、心の教育を展開することとしている。学校行事や児童会活動を中心に教育活動全体で取り組み、学期に1回いじめ防止に特化した道徳の授業を行っている。

児童の実態として、友達が固定化する児童が見られるようになってきた。また、学校生活の中で、自分の思いを通そうとする姿も見られ、思いやりのない言葉や態度が原因でトラブルになることも少なくはない。よりよい人間関係を築き、すべての児童が安心して学校生活を送るためにも、思いやりの心を育てる必要がある。そこで、道徳の時間において、「思いやり」に視点をあてた資料の選択、資料提示と発問の工夫を通して、道徳的心情を育てることを目指した。さらに自分との関わりで道徳的価値を捉えることを強化していくことは道徳的実践力の育成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

資料「青銅のライオン」内容項目2-(2)思いやり・親切(第4学年・6月)において、登場人物に寄り添い、価値に迫るため、資料提示と発問の工夫を通して実践を試みた。

実践1における研究上の手立て

(1) 資料提示の工夫

① 場面絵の提示

資料の内容についての理解を深めるために、プレゼンテーションソフトを使用した場面絵を提示しな

がら読み聞かせる。また、資料を分割して提示する。

(2) 発問の工夫

価値理解を深めるための登場人物の立場に立って価値を捉えさせる発問。

主人公の思いやりに触れた児童は、その後の青銅のライオンの思いを真剣に捉えようとしていた。終末の活動では、ライオンから主人公宛の手紙を書くことで、より深い価値理解に迫ろうと考えた。多くの児童が「今までのさみしさ」「怒り」そして「温かい思いやりに触れたことへの心地よさ」「優しさへの感謝」を書くことができていたが、ライオンの立場で手紙を書くという活動が、成長段階として困難な児童もいた。そのため実践2では自分との関わりで価値を捉えられるよう、以下のように改善した。

資料「心と心のあく手」内容項目2－(2) 思いやり・親切(第4学年・10月)において、価値理解を深めるための資料提示の工夫と、自己理解を深め、価値の自覚に迫るための発問の工夫を行い、以下の点に留意して実践を試みた。

実践2における研究上の手立て

(1) 資料提示の工夫

- ① 発問につながるキーワードを入れた場面絵の提示
- ② 登場人物の心情を理解するための心情マーク

親切を断られた時の主人公の気持ち、おばあさんの事情を知り、二度目の出会いの時の気持ち、おばあさんのことを見届けられた時の気持ちを表す心情マークを活用する。黒板に貼る位置にも留意する。

(2) 発問の工夫

- ① 主人公がとった行動の後、おばあさんの笑顔を見て自分も大きな喜びや満足を感じる場面における補助発問。
- ② 主人公の行動について児童の意見を問う中心発問。
- ③ 主人公と自分が行った親切の違いを考えさせることで価値の自覚を促す補助発問。

主人公の心情マーク(困惑→不安→喜び)が徐々におばあさんの笑顔に近づくことによって、児童は相手のことを考えた思いやりが大切であり、その行動が思いやりを受けた人も親切にした人も笑顔にすることを視覚的に捉えることができた。授業前に取ったアンケート(「どんな親切をしたことがあるか」)を振り返りながら、主人公の親切をどう思うか考えさせたことで、たとえ感謝の言葉などの見返りがなくても、「見えない親切」であると捉えられた児童が多かった。しかし、価値の自覚にまで迫るためには、自分の行った親切と主人公の親切の違いをより深く捉えさせる必要があった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

資料提示を工夫し、心情マークや場面絵を活用することによって主人公の心情の変化を捉え、更に主人公の行動について考えたり、自分の行動と比較したりすることでねらいとする価値の理解が深まり、思いやりの心情を持つことができた。

2 課題

価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成するためには、自分との関わりで道徳的価値を捉え、自己の生き方についての考えを深めることが必要である。

3 提言

道徳的価値を自分との関わりとして捉えるためには、自分の体験などに基づいて考えられる発問の工夫が大切である。児童が価値に対する自分の行動や考え方をしっかりと振り返ることで、これからの行動、生き方についての自覚を深めることができる。

＜授業実践＞

実践 1

- 1 主題名 思いやる心の大切さ 2－(2) (第4学年・1学期)
資料名 「青銅のライオン」 文溪堂

2 資料及び本時について

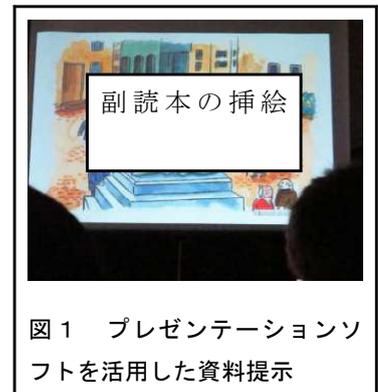
本資料は副読本の巻末に読み物として設定されている。

町の広場に据えられている青銅のライオンはずっと昔から多くの人の願いを叶えてきていた。人々は自分勝手な願い事を叶えてほしくて、氷のように冷たい体に座り続けた。ある日、一人の男の子が毛布を抱えてライオンを訪ねる。冷たいライオンを暖めてあげるために毛布をかけ、体をこすり続ける。ライオンは喜び、家まで男の子を送り届ける。翌日、背中に乗った人々は、ライオンの体がほっとあたたかいことに気付くという物語である。

本資料を読み、主人公の行為やライオンの思いを自分と比較したり共感したりしながら、手紙という形式で登場人物の心情を表現する活動を通して、児童に「思いやり」を持って他者に接することの気高さに気付かせた。そして、その「思いやり」の心こそ相手を暖め、変える力のある尊いものであることを感じ、「思いやり」の実践へとつなげていくことを目指した。

3 授業の実際

始めに、プレゼンテーションソフト(図1)を活用し資料を分割して読み聞かせた。資料1の場面では後に続く男の子の行動を予測させた。資料2の場面は、男の子の行為を中心として考えさせた。毛布をかけに行った理由を問うことでライオンの状況を知り、ライオンの思いを想像して行動する男の子の優しさやけなげさを感じ取らせることができた。そこで、吹き出し型ワークシートに男の子へのひと言メッセージを書かせた。児童は男の子の行為のすばらしさを感じ取り、それはライオンのことを思っている優しさだと受け止めていた。また、自分と比較して、その行為の意外さや気高さを感じていた。



資料3. 4の場面ではライオンの心情に迫る活動を行った。これは思いやりや親切を受ける立場の心情を考えさせ、その喜びを感じることによって、道徳的实践力につなげたいと考えたからである。

ライオンのさみしさを捉え、中心発問へとつながる補助発問

○ライオンはなぜよそよそしくつめたいまなざしで男の子を見たのだろう。



ライオンの心情や態度が変化した場面における中心発問

○次の日、ライオンの像がほっとあたたかかったのはなぜだろう。

主人公の優しさに触れたライオンの心情の変化を捉えさせるために、ライオンの言葉や気持ちをキーワードとして板書し、児童の思考の一助となるようにした。「男の子が毛布をかけてくれたから」「男の子があたためてくれたから」というような行為にのみ着目してしまう児童もいた。「願い事じゃなくて、ライオンのことを考えてくれたから」「ライオンのことを思って、行動してくれたから」と更に多くの児童が捉えられるように、児童の言葉をうまく引き出す補助発問の重要性を感じた。

親切を受けた側の心情を捉え、価値の理解を深めるための補助発問

○ライオンになって、男の子に気持ちを伝えよう。

終末の活動として、ライオンの喜びや感謝を捉えさせるためにライオンから男の子宛への手紙を書かせる活動を行った(次頁図2)。



図2 児童の手紙

ほとんどの児童が上の二人のように思いやりを受けた側のライオンの喜びや感謝、満足感を書くことができた。しかし、「ライオン」という立場をから手紙を書くことが難しい児童もいた。1学期の児童の実態としては以前取り組んだ「自分から〇〇へ」という手紙の形式の方が書きやすかったように思う。児童の実態や活動の目的を考慮し、今後も取り組んでいきたい活動である。

自分との関わりで道徳的価値を捉えさせる振り返りの場面	
T	みんなもライオンと同じようにうれしい思いをしたことはあるかな？
S1	ある。いっぱいある。はい、言える、言える。など（複数から反応多数）
T	どんなことだか覚えている？
S2	忘れ物した時、見せてもらった。
S3	転んだ時、「だいじょうぶ？」って保健室に連れて行ってもらった。
T	たくさん優しくしてもらった子がいるね。では、男の子と同じようにだれかのために行動できたことはあるかな？
S4	給食着を忘れた子の代わりに当番をしてあげたことがあるよ。

道徳的実践力につなげる振り返りの活動	
<p>ハートの付箋に自分が行った親切を書き留める活動である「思いやりウィーク」を設けた。友達からしてもらった親切を画用紙左側に書き留め、その時の自分の思いをまとめる。また、右側には自分が行った親切を書いた付箋を貼り、親切ができた時の気持ちを書く。(図3)してもらった親切や自分ができた親切を見返すことで現在の自分自身を知り、道徳的価値に関わる課題を培い、これからの実践へとつなげることをねらった。</p> <p>その後、学級活動の時間を使い、「思いやりウィーク」を振り返る活動を行った。</p> <p>感想には「親切を続けたい」「親切をした日はずっとうきうきしていた」「楽しかった」などが書かれていた。</p>	
<p>図3 親切をつづったカード</p>	

4 考察

- 内容や児童の実態に応じて、プレゼンテーションソフトによる場面絵を活用し、場面を切りながら読み聞かせをすることで主人公の心情の理解が深まり、価値を捉えやすくなると考えられる。
- 中心発問や価値の理解を深める最後の発問において、児童の考えを吹き出しや手紙形式で書かせることについては、4年生の1学期という発達段階のためかライオンの立場に立って手紙を書くということが困難な児童もいたため、児童の実態や活動の目的を考慮し活用することで児童の表現意欲を高め、価値理解を深めることにつながると考えられる。

実践 2

- 1 主題名 相手のことを思って行動することの大切さ 2 - (2) (第4学年・2学期)
資料名 「心と心のあく手」わたしたちの道徳 小学校3・4年

2 資料及び本時について

本資料は、足の不自由なおばあさんに会った少年の二通りの関わり方を描いている。一度目に声をかけ、断られた時の少年の困惑や家に帰り着いたおばあさんの笑顔を見て、心がぱっと明るくなった少年の喜び、満足感に共感しやすい資料である。少年が、なぜ声をかけずに後ろをついて歩くという行動をとったのかを考えさせることで、相手のことを思いやることの大切さを自覚させた。また、困っていること、大変な思いをしていることなどの相手の状況を想像し、相手の思いに寄り添った行動を取ろうとする心情を養うことを目指した。そして相手には直接伝わらないが、相手のことを思った行為は気高く、素晴らしいことであることを伝えていきたいと考えた。

3 授業の実際

まず始めに、本時の学習の見通しを持つために、自分が行った親切についてのアンケートの結果を紹介した(次頁図5)。資料はプレゼンテーションソフトを用い発問につながるキーワードを入れた図4のような場面絵を提示し、三つの場面に分けて読み聞かせをした。場面ごとに主人公の心の動きについて話し合い、心情マークによって視覚化することで児童の理解を深めた。

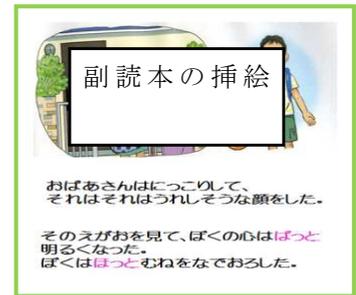


図4 場面絵

主人公の心情を理解するための補助発問

- 荷物を持つという申し出を断られたはやと君は、どんな気持ちだろう。(1の場面)
- おばあさんの後ろをついて歩くはやと君はどんな気持ちだろう。(2の場面)
- ほっと胸をなでおろした時のはやと君はどんな思いだろう。(3の場面)

主人公の心情を表す、心が「ぱっと」明るくなるや「ほっと」胸をなで下ろすなどの表現に着目し、ジェスチャーを取り入れることで理解を深めた。

主人公の心情の変化を視覚的に捉えさせるために心情マークや場面絵を利用した板書



※心情マーク 緑:はやと 黄:おばあさん

主人公の心情マーク(困惑→不安→喜び)が、おばあさんの心情マークに近づいていくことで、相手の思いを汲んだ親切の喜びと満足感を表している。

中心発問の前に、親切についての事前アンケート（図5）を振り返り、主人公と自分の親切を比べた。

自分との関わりで道徳的価値を捉え、道徳的価値に関わる課題を培う補助発問	
T：みんなの親切とはやと君の親切を比べてみて。違うところってどんなところなの？	
S3：親切の差かな。レベルが違う気がする。	
S4：はやと君は見届けて気持ち良くなってるよね。	
T：みんなは「ありがとう」って言われたかな。	
S5：ああ（ぼくたちのは）やりきったことで、（はやと君は）断られたけど、ついてったり、見守ったりした。	
S6：（ふつうは）やって、親切。（はやと君のは）おばあちゃんががんばっているのを（見て）気持ちいいと思った。	
S7：両方がありがとうって気持ちになっている。	
T：おばあさんには伝わってないけど…。	
S8：あっ、そこが違うところだね。	
S9：方法は違うけど、人への思いは一緒だね。	

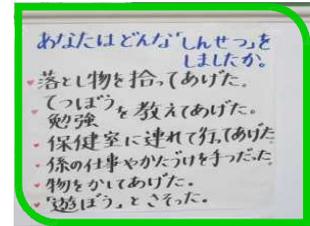


図5 事前アンケート

価値理解を深める中心発問
○ あなたははやと君が後ろをついて歩いたことについてどう思いますか。

この発問によって、児童はねらいとする道徳的価値に関わる自分の考えを振り返ることができた。そして、意図的に指名し発言をさせることで価値の共有化を図り、全体の価値理解を深めた。

意見交流の場面（中心発問における意図的指名・下線は着目したい児童の言葉）
S1: すごくえらいです。もしおばあさんが転んだり倒れたりしたらすぐに助けてあげられるからです。
S2: 伝わっていないけど、 <u>見えない親切</u> だと思います。
S3: やさしいです。 <u>おばあさんもそれを知ったら喜びます。</u> あきらめない心がすごい。
S4: とても親切です。 <u>おばあさんのことを考えて見守ってあげようとした</u> からです。
S5: <u>両方にとっていいこと</u> です。おばあさんにはりハビリ、はやと君はつきそって喜びがあったから。

上記のように、児童は「相手の状況を考えて行動すること」の大切さについて感じ取ることができた。また、伝わらなくても相手のことを思った行為は素晴らしいと捉えられていた。意図的指名で発言をさせると、それ以外の児童の意見がなかなか引き出せないことがある。補助発問を加えながら、より活発に意見の交流が図れるようにしていきたい。

最後にアンケートを再度振り返りながら、これからの自分自身の生活を考えた（図6）。この活動は道徳的価値の自覚を深め、児童の道徳的実践力の育成につながると考えられる。じっくりと取り組む時間と活動の工夫が更に必要であると感じた。右は児童の振り返りの場面での記述であるが、なかなか書けない児童もいたので、教師が「表れてほしい児童の反応」を踏まえて、例示すると考えやすくなる感じた。

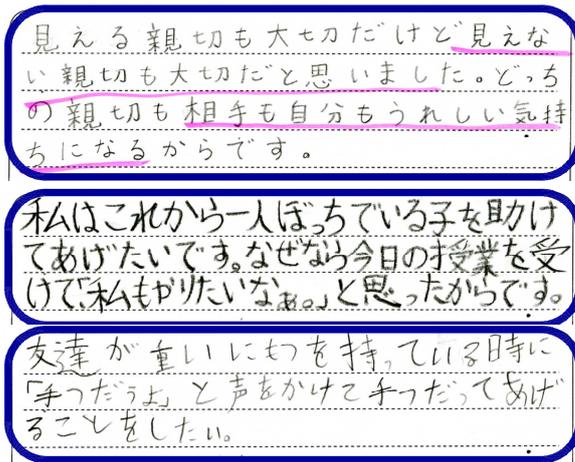


図6 児童の振り返り

4 考察

- 心情マークや場面絵の提示など板書の工夫は主人公の心情を捉え、価値に迫るのに有効であった。
- 事前のアンケートを用い、自分の行動と主人公の行動を比較し、主人公の行動についての意見を問う中心発問を設定したことで、道徳的価値に関わる自分の考え方や行動を振り返ることができた。
- 終末の活動で自分の行動と主人公の行動の違いを捉えさせたり、これからの自分の行動について考えさせたりする時間を十分持つことで道徳的実践力の育成につながると考える。